

黒のシンボリズム (1)

ー ヒエロニムス・ボスと黒人 ー

神原 正明

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2017 年 10 月 1 日 受理)

ヒエロニムス・ボスの「快樂の園」には中央パネルに黒人が点在している。正確に言えば前景に 4 人、中景の池に 6 人、後景に 4 人の計 14 人である。多くは女性であるが、そこに人種差別はなく白人と同等に表現されている。この作品が制作された西暦 1500 年前後は西洋絵画で多くの黒人が描かれ始めた頃である。ことに「マギの礼拝」という主題を通じて三王の一人を黒人として描くことが定着していった。ボスもまたこの主題で優れた作例を残している。本稿ではボスに至る黒人に向ける西洋側からの視線と黒という色彩のもつ意味を、中世からルネサンス美術史の中で、見直してみたい。

1・ハムの呪い

「ハムの呪い」Curse of Ham は黒人奴隷の存在を説明するのに起源となる、いわば病因(etiology)である。「創世記」(9:18-25)には次のような記述がある。「箱舟から出たノアの息子は、セム、ハム、ヤフェトであった。ハムはカナン之父である。この三人がノアの息子で、全世界の人々は彼らから出て広がったのである。さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作った。あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナン之父ハムは、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。ノアは酔いからさめると、末の息子がしたことを知り、こう言った。『カナンは呪われよ奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ』」(共同訳)。

創世記では酔ったノアを息子のハムが罪深くながめ、その罰としてノアはハムの息子に奴隷となる呪いをかけた。ノアの息子は三人いた。彼らは洪水の時箱舟に乗り救われた。そこから人類は広がり、世界は3つに分かれアジアとアフリカとヨーロッパとなった。黒人の起源はノアの息子であるハムに始まると言われるが、聖書には肌の色について何も語られていない。つまりその後付け加えられた解釈ということになるが、重要なのは黒い肌と奴隷という二つの要素が結びついたという点である。しかも呪いがハムではなく、その息子のカナン Canaan にかけてられるという点も重要だ。

聖書は奴隷の呪いをカナンに制限するのだが、その父のハムももちろん呪いに含まれるはずだ。加えていくつかの疑問が思い浮かぶ。呪いはすべてのダークスキンの人々に作用

したか。それとも黒人のアフリカ人だけだったか。あるいは呪われた者の肌はすでに黒かったのか。ノアは奴隷と黒い肌という二つの呪いをかけたのか。そうではなく黒い肌は奴隷の呪いの結果なのかというような問いである¹。

時が立ち黒い肌は呪いの一部だと理解されるようになる。黒人の起源の神話がいつ、どこで、なぜ、いかに奴隷の起源物語にすりかわったか。黒色と奴隷は一つに結びつき、聖書は黒色を永遠の奴隷の合言葉としたという考えが、南北戦争以前のアメリカの主張であり、奴隷制度を維持する根拠となった。しかしノアによる奴隷の呪いにブラックネスをつけ加えるのはアメリカに始まったわけではない。カナンを黒人と結びつける系譜は聖書には見つからないが、古代中近東の神話に現れ、共通してイスラムの伝統に組み込まれた。ノアの物語とは結びつかないが、時を経てカナンの共通の性格を通して聖書の物語に移植された。こうしてそれは4世紀にシリアのキリスト教徒によって書かれたとされる新約聖書外典「宝の洞窟」の中に現れる²。

ノアの物語はキリスト教の文脈だけに出てくるものではない。これを解釈するうえで、中近東での始まりとヨーロッパとアメリカでの受容を明らかにすることが必要になる。ノアの物語を扱ったイスラムとユダヤ教の源泉の研究がある³。ユダヤ教の神学者たちはノアの呪いはブラックネスがもつ特性の一つだと解釈した。ノアの奴隷の呪いの原因を説明する異なったアラビアヴァージョンは呪いが箱舟でのセックスに起因するのだと主張する。箱舟内での性交渉を議論するなかで、ユダヤ人の注釈者ラシ Rashi (1040-1105) が引用される。ハムの息子であるクシュ、ミツライム、ブシュ、カナンのうち、最初に黒色になったのはクシュだとする。このことは聖書の呪いでハムの子孫の何人かがブラックネスになったことを暗示する。奴隷とダークスキンを結びつけて呪いを解釈する。さまざまな構成要素がハムの呪いを形づくるために結合された。

ハムの呪いは、キリスト教ヨーロッパへのイスラム影響を通して東方から西洋に道をつけた。最初の現れは12世紀のイベリア半島だという⁴。「ハムの呪い」Curse of Hamに加えて「ハム族の仮説」Hamitic Hypothesis と「ハムの神話」Myth of Ham という用語がある⁵。ハム族の仮説は、ブラックアフリカで見つかる文明化した技術的進化はハム族として知られる黒人のものではないという考えである。今では否定されているが、それはアフリカ外からやってきたコーカサス人によると信じられた。

ハムの呪いは、誰を中心に見るかによって、ノアの呪いともカナンの呪いとも呼ばれる。キリスト教とユダヤ教の著作者はカナンに目をつけ、それが黒い肌の引き起こした奴隷の呪いを受けた者とする。それに対し、イスラムの作家はハムを二重の呪いを受け止めた者とみなす。カナンに基づいた物語に対し、ハムに基づく聖書物語の展開は聖書との直接の出会いからは知られず、独立したイスラム伝統から移されたものだ。カナンに基づく物語に関しては、アフリカでのイスラムの征服がこれらのハムに基づくブラックネスの系譜にも影響を与えた。これによるアフリカ人奴隷の増加がブラックスキンの系譜学を黒人

奴隷の系譜学へと移行させた。そこではブラックスキンがノアの奴隷の呪いの一部と信じられた。アフリカからの初期の奴隷貿易の歴史的発展を反映しながら、さまざまな伝統が異なったルートを通してハム（イスラム）やカナン（ユダヤ / キリスト教）に焦点をあて、ブラックネスと奴隷制を結合したノアの呪いを語り続けた。

教会教父の時代、「カナンは箱舟で生まれていたから呪われた」として4世紀ミラノの聖アンブロジウスが議論に加わる。アンブロジウスはカナンが箱舟でのハムの性的無分別のゆえに罰せられたと考えた。ノアの呪いはハムに「永遠の不名誉の恥をさらす」ことで果たされた⁶。ハムではなくカナンが呪われたことは、ハムの子孫すべてに呪いが及ぶことを意味したのである。それはのちのイスラエル社会でカナン人 Canaanites の隷属的地位を説明することになる。イスラエルの勢力拡大に伴い、追放や殺害ではなく労働を強いるためにカナン人が利用された。士師記（Judges1:28）は語る。「イスラエルは強くなったとき、カナンびとを強制労働に服させ、彼らをことごとくは追い出さなかった」

最初黒い肌の人々は呪いの影響を受けた者だと言われた。その後ブラックネスが呪いそのものの一部となった。いったん黒がノアの呪いの一部だと理解されると、ハムの呪いがアフリカ以外のダークスキンの人々にあてはめられるのはすぐだった。新世界の発見に伴いヨーロッパの植民者は、原住民を聖書のカナンの土地や人々と比較し、自分たちの征服を正当化した。スペインの冒険家マルティン・フェルナンデス（1470-1528）はこれを主張した最初の一人で、王への報告の中で書いた⁷。人種差別の考えをヨーロッパに移した経緯としては、15世紀ポルトガルの年代記作者ゴメス・エアネス（1410c.-1474）がハムの呪いをはじめてヨーロッパに伝えたと言われる⁸。

新世界の原住民だけが呪いを引き起こすダークカラーの持主ではなかった。さらに農奴 serfs の問題が加わる。中世のキリスト教ヨーロッパではハムの罪は農民、ことに農奴の起源と見られた。アダムの子カイン Cain はときに農民の祖先とみなされたが、その役割を最初に演じたのはハムだった。いくつかの原典の中で14世紀初めの「正義の鏡」が引用される。農奴制 Serfage は古代よりはじまり、どんな自由な貯蓄もそこには見出せない。この農奴制はノアが息子ハムのさらに息子であるカナンに課した呪いからくるもので、ハムは農奴の父、転じて農民、貧者、下層民と見られた⁹。

聖書の物語を詳述する「宝の洞窟」のテキストはカナンが奴隷制度で呪われ、カナンの子孫がダークスキンの人々だったことを付け加える¹⁰。ノアの物語の解釈中、ここではじめてダークスキンと奴隷制が結びつけられた。こうした聖書解釈の促進は、アフリカ外にいる黒人が一般には奴隷として知られているという社会構造に由来する。アフリカでのイスラムの征服と中近東での黒人奴隷の増加に伴い、ノアの物語は新しい局面を迎える。奴隷の呪いを受けた者はもはや、シリアの「宝の洞窟」での記述のように、黒人の祖先と言われるだけでなく、黒い肌が今ではノアの呪いの一部をなすと言われる。

新しい歴史状況を反映したこうした展開は、広い範囲のイスラム文学や東方のイスラム

圏で書かれたキリスト教やユダヤ教の著述の中で見られる。

2・奴隷貿易

1421-22年、明王朝は東アフリカ（現タンザニア）とコンタクトをもち、極東にまでブラックアフリカは知られていた。エジプト、ギリシャ、ローマ、アラブはブラックアフリカンを奴隷とした¹¹。全ヨーロッパがアフリカの奴隷貿易に参入し、300年以上続いた頃、奴隷がヨーロッパに満たされる。約1250万人が直接アフリカから植民地に船で運ばれ、中近東や北アフリカでは溢れかえるという状況だった。15世紀からは黒人はヨーロッパ中の都会シーンで目に付くようになる。特に港町や統治する宮廷においては目立った。

ポルトガルの最初の奴隷計画は1451年のことで、1500年までに15万人の黒人のアフリカ人がとらえられ、ポルトガル経由でヨーロッパに売られていった。特にブラジル到達者としても知られるカブラル Pedro Alvares Cabral の艦隊はマルキオンニ Bartolomeo Marchionni の船団を含んでいた¹²。マルキオンニは1490年代までベニン川からの奴隷貿易を独占した人物である。リスボンでのフィレンツェ商人の大コミュニティのメンバーとして、奴隷を船でマデイラ島 Madeira に運ぶ。そこは彼が砂糖のプランテーションをおこなっていた場所だ。そしてポルトガル、ピサ、トスカナ地方にも拡張する。黄金海岸のエルミナ Elmina では奴隷はアフリカの商人に黄金と引き換えに売られた。

フィレンツェに残る「マギの礼拝」を描いた絵画作品に登場する黒人は、これらのアフリカ人に直接出会っていた証拠かもしれない。巨大なジェノヴァの奴隷市場が黒海の町カッファ Caffa に始まり、黒死病によるヨーロッパ人口の大量の減少が、おびただしい数の奴隷を14世紀末から15世紀のイタリアに流入させていた¹³。フィレンツェの記録は都市の奴隷人口の多くは黒人ではないと書いてはいるが、一方で若い黒人女性はヴェネツィアの売春宿に売られている。

フィレンツェではロレンツォ・モナコが1422年頃の「マギの礼拝」で中央部分に大きくマギの従者として黒人を描いた [図1]。ゴッツォーリ Gozzoli も1459年にパラッツォ・メディチの礼拝堂で黒人のマギの従者を描き、黒人表現に磨きをかけた [図2]。遠くの行進でラクダに乗る黒人が何人かいる。前景にいる格調高いアフリカ人の射手は、たぶん1459年の若きポルトガル枢機卿の死まで仕えていた「黒人のバスティアン Bastian」という名の現実の奴隷をモデルにしているようだ¹⁴。1460年代とその後フィレンツェにもたらされた増加する黒人奴隷の源泉はポルトガルにあった。フィレンツェの商人はポルトガルによる西アフリカの奴隷貿易を担っていた。白人のマギに随行する美しい黒人の召使はギルランダイヨ (1487) [図3] やフィリピーノ・リッピ (1496) [図4] に見られるが、1486年のフィレンツェ史を反映する。この年はマルキオンニがギニア Guinea の海岸での奴隷貿易の権利をポルトガルから譲渡された年だった。イタリア美術での黒人のマギの従者の位置は、支配的とは言えないが安定している。

ポルトガルのヴィゼウ Viseu にある「マギの礼拝」は、ヴァスコ・フェルナンデスの1501年の板絵だが、そこで最も年長のマギは、キリストに近く控えめな姿勢であいさつをしている[図5]。その肖像はたぶんカブラル自身だ¹⁵。このパネルの制作時期カブラルは35歳くらいだった。その白髪の見かけは、一人のマギの老齢さと関連付けようとしている。ブラジルに上陸したあとカブラルの艦隊はアフリカの海岸で竜巻に出くわし、11隻中4隻が沈んだ。目的地のカルカットでは武装した戦いに巻き込まれ、艦隊は半減した。カブラル経由でポルトガルはキリスト教世界に海外で獲得した富を与えた。ヘンリー航海王(エンリケ)の時代のモットーによれば「神と黄金の名において」Em nome de Deus e do lucroとある¹⁶。珍しい贈物として銀を台にしたココナツの殻のカップが見られる。

黒人の登場する「マギの礼拝」という主題にとって大西洋での奴隷貿易の始まりは、エチオピアのプレスター・ジョンとの接触と合わせて重要かもしれない。このテーマはことにドイツで広がりをもつ。イタリアのシエナで制作されたニコラ・ピサーノの説教壇での礼拝図の黒人でさえ、部分的にはホーエンスタウフェン朝フレデリック2世の宮廷での実際から影響された¹⁷。黒人王の主な舞台はドイツとチェコだった。フランドルやイタリアがためらいがちなのに対して、中世末のドイツ美術はこれについては積極的で独創的だった。

3・黒人のマギ

先述したヴィゼウにあるトゥピナンバ族 Tupinamba の登場する「マギの礼拝」パネルは、最初のたぶん唯一の新世界のマギとして描かれた。変則的ではあるかもしれないが、マギ自身ははじめて本質的な「他者性」otherness をもった人物だった。11世紀にカルトジオ修道会の聖ブルーノ Bruno は書いている。「主が誕生の栄光を伝えようとしたのは、異邦の非ユダヤ人である三人の男に対してだけだった。イエスのもとにやってきた3人に対応する。世界のすべての領域からひとつの信仰に向かって集まる。3人の男がすむ場所はすべての場所であり、我々すべては唯一の神を信仰しなければならない。こうしてこの一つのものからすべては創造される」¹⁸。

黒人のマギあるいは王は、どのように、なぜ西洋美術でスタンダードなものになっていったのだろうか。マギとは別にキリスト教伝説では「賢人」Wise Men という語がある。マタイの福音書では「マギ」、つまりペルシャの僧侶か哲学者として記述される。2世紀までに「王」を意味しはじめ、12世紀までにそれが一般化する。ベツレヘムへの訪れを表現したものは、「マギの礼拝」Adoration of Magi、「三王礼拝」、「東方の三博士」あるいは単に「礼拝」と呼ばれる。今まで知られていた世界に対して、マギの礼拝はキリスト教のユニヴァーサルリズムを脚色した。1500年ののちでさえもこの同じモチーフは世界の新しい多様性に対応せねばならなかった。

中世の地図製作者が世界の中心に位置づけたエルサレムに向かって、世界の彼方にばらまかれた人々を代表する王たちがやってくる。マタイによる福音書（Matt. 2:9）にあるように東の星に導かれてである。黒人のマギはその風変わりを具現するように奇妙な衣服を着て、腰をひねるポーズを取ったり、耳をイヤリングで開けたりと、他の二人のマギにはない特徴をこめた。贅沢なドレスは黒人のマギが、自己を誇示するもので、他のものが単にそこにいるだけなのと対比をなす。イタリアが最も保守的でブロンズの第3の王を守る。ここでは15世紀初めからマギに強いアジア的性格をもたせて描いた¹⁹。多様性を具体化するためにマギは時空間を統合する。マギの一人は他の二人とは異なったトリオを構成する他者性を保ちはじめた。

黒人のマギと残りのマギとの二元論的な対比は、視覚面での極大と極小、黒人の王の闇とキリストの「顕現」epiphanyの光との対比となる²⁰。中世末と近代初めのマギ表現の二分法で明らかなのは、色のことだ。黒人が中世末にマギに現れ始めた。第3の王と他の二人の白人王との間には、はっきりとした対比がある。第1と2の王はいつも白人で、中近東の人としてターバンを巻いて描かれる場合もそうだった²¹。

マギの物語に黒人が登場する最古の例は1160-1200年のノルマンディ地方ルーアン近郊の壁画に出てくる[図6]²²。主題はヘロデ王の前のマギで、三人の白人のマギのそばではなくヘロデの後ろにアフリカ人が立つ。この黒人の付き人は歯をむきだしにして、刀剣をもち、ヘロデの悪人の取り巻きの一人と見なせる。13世紀中頃からは黒人の召使が白人の王に仕える旅や礼拝に見つかる。中央ヨーロッパで肌の色が第3の王に置かれたエグジチックな特徴として、年齢に取って代わる。それまでは老人、中年、若者という年齢による三区分が順守された。1300年代初めになるまで黒人のマギの随行者さえイタリア美術では現れない。1315-30年頃のフレスコ画にこのモチーフの好例がある[図7]。ヴェローナのサン・フェルモSan Fermo教会である²³。1350年以降神聖ローマ皇帝カール4世（ルクセンブルクのシャルル）の時代に黒人のアフリカのマギが美術に出現する。その後1440年頃に最も熱心に黒人の王がヨーロッパ美術で一般的になる。ことにヨーロッパのドイツ語圏でのことだ。黒人のマギが登場して黒人の召使に新たな意味が与えられるが、イタリアでのこの変化はかなり遅れる²⁴。

1360年頃神聖ローマ皇帝カール4世 Charles IV が設立したプラハのエマオ修道院 Emmaus Cloister の壁画が、多くの黒人を含んだ重要なイメージとなる²⁵。3つの構図があり、「パンの奇跡」Miracle of the Loaves と「魚の奇跡」Miracles of the Fishes と「マナの収集」Gathering of Manna で、3つの主題のそれぞれは色のちがういくつかの人種を含んでいる。群像は人間の多様性を示す。パンと魚の物語に関して、福音書はこれらの群衆が非ユダヤ人 Gentiles からなり、他方マナの物語ではそれはユダヤ人だとする。しかし黒人のユダヤ人はすでにペンテコスタのイメージの中で描かれ、黒人のユダヤ人のいる「マナの収集」は1400年頃のヴェネツィアでも絵画と彫刻で見られる。ボヘミアの作家と

それを見る人たちにとってエチオピアと同じくチェコもキリスト教世界の周辺に属していた。

15世紀最後の四半世紀から16世紀前半にかけて、黒人のマギは礼拝図に遍在するだけでなく、これらの場面自体が共通の芸術の主題になっている。文字通り何千というエピファニーの絵画が1480-1530年間にヨーロッパ北方で生み出されている。いくつかは教会の祭壇画として、いくつかは私的な信仰のイメージとして機能した。16世紀のアントワープはこの絵画の多くを制作し、どんな家庭にも一点はこれを所有したという²⁶。ネーデルラントの画家フアン・デ・フランドス Juan de Flandes にスペインのパレンシア近郊で制作した祭壇画のブレデッラがある[図8]²⁷。1497年頃のもので画家は三人のマギを二つに分け、二人はマリアの右に位置し最初の到着を伝える。黒人は一人マリアの左で、顔を下に向け孤立する。エレガントな着こなしのアフリカ人で3本の大理石の柱の一つの正面に立つ。

1526年の日付をもつパネルで、アルザスの画家ステッターは、「マギの礼拝」で壁やアーチやドアや窓を遠近法的に描いた[図9]²⁸。黒人は他の二人のマギから孤立し、絵画面を垂直に分断する壁の外にいる。黒人の右手は壁に隠れており、贈物も隠れて見えない。花瓶や葉飾り、ルネサンスのグロテスク装飾で重なり合う人物像のあるフリーズが壁の側面を飾っており、それが贈物の代用のように読める。第二のマギはドア越しに黒人に向かって振り返っている。第一のマギは直接聖母子と対し、第二のマギはそれに隣接する。第三のマギは第二のマギと顔を合わせて立っている。黒人は青年、第二のマギは中年、第一のマギは老年として描き分けられているようだ。

「マギの礼拝」を描いたフランドル絵画で黒人のマギがスタンダードになっていくのは1450年頃からだ。1500年にマギの数の固定は変動する。伝統の力は第四のマギを非聖書的なものとした。聖書は複数の「王」と書いてあるだけだ。先にあげたカブラル Cabral の上陸は、全世界は3つに分けられないことを示し、新しい空間環境を決定的にした²⁹。1500年にこのパネルを見たものは、トゥピナンバ族をもっともなじみのある他者で風変わりな姿をしたものとみなしただろう。もう一人の王は年齢はどうで、貢物は黄金、乳香、没薬以外なら何か。画家はトゥピナンバをこれまで第一の最も年長のマギがいる場所には置かなかった。つまりキリストの最も近くにいてひざまずき、最も高価な贈物をもたらす人物としてではない。ヒエロニムス・ボスもプラド美術館の「マギの礼拝」で第四の王として、ヘロデ王あるいはアンチクリストと解釈できる人物を加えた[図10]。

4・シバの女王

3世紀初めのシバの女王がソロモン王に贈物をする物語は、キリストを訪れるマギの旧約聖書での予兆であり「影」である、と、長らく考えられた³⁰。アフリカの場合は黒人と考えられたシバの女王は、ブラックネスのポジティブな実例としてイコノグラフィーに導入

された。シバの女王は11世紀からマギのプロトタイプとなる。異邦の支配者がユダヤの主を礼拝するという点で、シバの女王とマギは、それぞれソロモンとキリストに対する。シバ（Sheba あるいは Saba）の地は北東アフリカの海岸かアラビア半島の尖端で紅海の向うに位置する。

1220年頃シャルトル大聖堂の北側の柱の脇に最も美しい作例が見られる〔図11〕³¹。白人のシバの女王の足もとにコインか宝石の入ったボウルとそれを入れていた包みをもった黒人の男がしゃがんでいる。カンタベリー大聖堂北側の聖歌隊席の翼廊にあるステンドグラスもまた、すべて白人の礼拝図が「ソロモンとシバの女王」のイメージとマッチしている〔図12〕³²。1175年と1220年の間に制作されたこの円盤で女王は二人の付き人とともに白人だが、さらに右にはアフリカの黒人が二人ラクダに乗っている。

黒への重要な言及はソロモンの歌でのソロモンの恋人の一人にある。ソロモンの歌（Song of Songs 1:4）での「私は黒いけれども美しい。おおエルサレムの娘たち」に対応する。シバの女王のブラックネスはニコラス・オヴ・ヴェルダンが1181年にはじめて描いた〔図13〕³³。そこでは黒い花嫁のイメージを、肌は黒いがアフリカ人ではなく、エレガントな女王として表現される。長く軽やかな髪をもち、右手でソロモンにしぐさをする。左手は二人の白人の召使の背に置いている。

シバの女王に加えて、ポジティブな黒人のイメージの典型は、アフリカの黒人としての聖マウリティウス Maurice の描写である³⁴。マウリティウスはエジプト人で、ナイル川上流のテーベ（Thebaid, Roma Theban Legion エジプトのテーベで、同じ名のギリシャの都市テーバイではない）で徴用されたローマ軍の司令官だった。キリスト教の洗礼を受け、今のスイスでキリスト教徒の虐殺に抵抗して287年頃に殉教した。テーベの墓は巡礼地となり、515年までにブルグント王国のジギスムント Sigismund of Burgundy は埋葬地に新しい僧院を建設した。聖マウリティウスのイメージはドイツ北東部に数多く出てくるが、黒人としての最初の知られているイメージは、1232年前後に制作されたマグデブルク大聖堂のものだ〔図14〕³⁵。それはフレデリック2世か、10世紀に司教区を設立した皇帝オットー1世を表したと考えられている。マグデブルクはフレデリックの強力なサポーターで、マウリティウスは皇帝の公的イメージとなり、マグデブルクの騎馬像と聖マウリティウス大聖堂は一体のものだった。フレデリックは特にアフリカの従者を伴っていたので、フレデリックが没して久しい1283年にドイツに現れた偽者は、皇帝の証しとして三人の黒人の従者と宝石を身に着けた侍従を連れていた³⁶。

最初のブルグント王国を滅ぼしたメロヴィング朝も聖マウリティウスの崇拝を引き継ぎ、自分たちの守護聖人とする。888年にブルグント王国が再建されたとき、ルドルフ1世は聖マウリティウスの墓の地で王位についた³⁷。このアフリカの殉教者の信仰は、936年からドイツ王、962年から皇帝となったオットー1世（大帝 Otto the Great）から新たな局面を迎える。オットーはマウリティウスを自身の守護聖人にし、新生の神聖ローマ帝国

のパトロンとした。新しい皇居のあるマグデブルクでこの聖人を讃えた。聖マウリティウスのイメージは、彫刻、ステンドグラス、祭壇画で知られ、黒人のマギの下敷きとなった。

15 世紀後半から黒人のマギは西洋全域で急速に広がっていったが、黒人が当時の画家に深い意味をもったわけではない。伝統となればそれを保守的に踏襲しただけだっただろう。もう一人具体的事例として、聖人でも聖書の登場人物でもない人物プレスター・ジョンをあげておく必要がある。1122 年にローマ訪問者が伝えたもので、フィクションのキリスト教聖職者で、イスラム勢力との戦いに接する地にあって、東方を治める王だった。12 世紀中頃に最初に現れた時からプレスター Prester つまり聖職者 Priest のジョンは三王の末裔だとされた。1145 年に書かれた年代記の中で際立った記述がある³⁸。十字軍のニュースがもたらされ、帝国の南東の境界に位置するオーストリアの支配家系に生まれた年代記作者は旅行者の物語を念入りに集め、プレスター・ジョンはマギの一人の末裔で、ネストリウス派のキリスト教徒としてイスラムと敵対し、ラテン民族が聖地を征服するのを待ち望んだ。1165 年に引用された手紙の翻訳が現れる。プレスター・ジョンがビザンチンの皇帝にあてたもので、助力を求めた内容だ。イスラム教圏の南にあるアフリカでのキリスト教の存在や、東方のイスラムの敵モンゴルの存在は、このフィクションに影響したが、どの程度のものだったかは不確かなままだ。14 世紀初めにはプレスターの故国の推定は東方からナイル川上流かエチオピアに移動し、黒人となった。これがほぼ黒人王が西洋美術に登場し始める時期と重なる。黒人王がプレスター・ジョンだと言っているのではない。1360 年以降多くのヨーロッパの王室が自らをマギとして表現したとき、空しく現実の黒人の支配者を探すことになったということだ。15 世紀に教皇とアラゴン王がエチオピアのネグス Negus of Ethiopia なる人物と条約を取り交わしたとき、それがプレスター・ジョンだと思っていた。エチオピアの伝説上の王プレスター・ジョンとともに、三王の一人とされた富裕なマリ帝国の王にマンサ・ムーサ Mansa Musa of Mali がいる。彼はメッカに巡礼を行なった。

注

*本文中の [図] については、<http://www.kusa.ac.jp/~kambara/180331.htm>

- 1 Goldenberg, D.M., *Black and Slave: The Origins and History of the Curse of Ham*, Walter de Gruyter GmbH & Co KG, 2017, p.5.
- 2 E. A. Wallis Budge, *The Book of the Cave of Treasures*, (translated from the Syriac), London, 1927.
- 3 Goldenberg, *op.cit.*, p.24.
- 4 *Ibid.*, p.200.
- 5 *Ibid.*, p.3.
- 6 *Ibid.*, p.22. Sancti Ambrosii, *Mediolanensis episcopi, Opera omnia, juxta editionem monachorum S. Benedicti*. 'Mansit perpetuae obnoxius opprobrio turpitudinis'.
- 7 *Ibid.*, p.174. Martin Fernandez de Enciso, *Summa de Geografia*, 1519.

- 8 *Ibid.*, p.2. Gomes Eannes de Zurara, *Cronica do Tomada de Ceuta*, 1449.
- 9 *Ibid.*, p.183. Andrew Horn, *La somme appelle Mirroir des justices : vel Speculum justiciariorum*.
- 10 *Ibid.*, p.199.
- 11 Bindman, D. et al., *The Image of the Black in Western Art: From the early Christian Era to the "Age of Discovery": from the demonic threat to the incarnation of sainthood*, Harvard University Press, 2010a, p.xvii.
- 12 Bindman, D. et al., *The Image of the Black in Western Art: pt. 1. From the "age of discovery" to the age of abolition: artists of the Renaissance and Baroque*, Harvard University Press, 2010b, p.16.
- 13 Kaplan, P., *The Rise of the Black Magus in Western Art*, Ann Arbor: UMI Research Press, 1985. p.13.
- 14 *Ibid.* p.14. Lorenzo Monaco, *Adoration of the Magi*, c. 1422, Galleria degli Uffizi. Benozzo Gozzoli, *Journey of the Magi*, 1459–61, Chapel of the Medici Palace.
- 15 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.15. Vasco Fernandes, *The Adoration of the Magi*, 1501–06, Grão Vasco Museum, Viseu, Portugal.
- 16 *Ibid.*, p.16.
- 17 Kaplan, *op.cit.*, p.3. Hohenstaufen Emperor (Frederick II).
- 18 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.12.
- 19 Trexler, R.C. *The Journey of the Magi: Meanings in History of a Christian Story*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1997, p.103.
- 20 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.13.
- 21 Trexler, *op.cit.*, p.104.
- 22 Kaplin, *op.cit.*, p.7. Petit-Quevilly, vault-painting, *Les mages devant Hérode*.
- 23 Bindman, *op.cit.*, 2010a, p.17. San Fermo, Verona, *Adorazione dei Magi* attribuiti a Paolo Veneziano.
- 24 Kaplin, *op.cit.*, p.15.
- 25 Bindman, *op.cit.*, 2010a, p.19.
- 26 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.35.
- 27 *Ibid.*, p.27. Iglesia de Santa Maria del Castillo (Cervera de Pisuerga).
- 28 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.29. Wilhelm Stetter, *Adoration of the Three Kings*, 1526, The Walters Art Museum.
- 29 *Ibid.*, p.12.
- 30 *Ibid.*, p.33.
- 31 Kaplin, *op.cit.*, p.10. *The Queen of Sheba and her Nubian Slave*, Chartres Cathedral.
- 32 *Ibid.*, p.9. *The visit of the Queen of Sheba to King Solomon, A white queen with a black entourage*, Canterbury Cathedral Stained Glass.
- 33 Kaplin, *op.cit.*, p.8. Nicholas of Verdun, *Klosterneuburg Altarpiece* (1181), Stift Klosterneuburg.
- 34 Bindman, *op.cit.*, 2010a, p.4. Gude Suckale-Redlefsen, *Mauritius: Der heilige Mohr/The Black Saint Maurice*, Houston, 1987.
- 35 *Ibid.*, p.15. *St. Mauritius um 1250*. Dom St. Mauritius Magdeburg.
- 36 Kaplin, *op.cit.*, p.10.
- 37 Bindman, *op.cit.*, 2010b, p.33.
- 38 *Ibid.*, p.34. Otto, Bishop of Freising, *The Two Cities: A Chronicle of Universal History to the Year 1146*, Columbia University Press, 2002.

The Symbolism of the Black (1) : Hieronymus Bosch and Black People

Masaaki KAMBARA

College of the Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2017)

The Early Netherlandish master Hieronymus Bosch placed the black people in the central panel of *“The Garden of Earthly Delights”*. To be exact, there are four in the foreground, six in the pond in the middle scene, four in the background, a total of 14 people. Most of them are female, but we can not find racial discrimination there and they are expressed equally to white people. Many blacks appeared in Western paintings around 1500 AD when this triptych was produced. Particularly on the theme of *“the Adoration of the Magi”* one of the three kings was represented as a black person. Bosch also has excellent examples on this subject. In this article we review the attitudes of Christians to blacks and the meaning of the color of black in the art history from Medieval to Renaissance up to the work of Bosch. The Curse of Ham is the starting point to consider black slaves, but black skin and slaves are tied in the flow of time, blackness becomes part of the curse itself. In the background of slave trade in the 15th century, the iconography of the black is established. In addition to the Black Magus, the personality of the Queen of Sheba, St. Mauritius, or Prestar John brings about the formation of a positive black image.